

ッによって発表された立体構造説は分子の形によるというものである。すなわち臭細胞膜上のどの部分に結合するかは分子の形により、分子にくっついている官能基が結合時に臭細胞に対していかに親和性を持つかということにある。これは先のダイソンの説にあてはめると、付加基の位置、分子の形によりにおいが異なるという説と一致する。

そして最もらしいのが分子振動説である。化学構造説に行きつづまったダイソンは、一九三七年この説を唱えた。彼は分子の振動が、ある領域内にあるもののみにおいを引起すというのである。それをオスミック振動数といひその波数領域を一四〇〇〜三五〇〇と主張したがあまり説得力がなく、まもなくかえりみられなくなった。二〇年後ライトはふたたび分子振動説をよみがえらせオスミック振動の波数領域を五〇〇〜五〇〇と改めた。分子の振動エネルギーが鼻の粘膜を刺激して、においを起させるというのは何となくうなづける。たゞその波数領域を持たないでにおいを有する物質が、どのように変化してその波数内に入るかが問題である。H₂Sはオスミック振動数に入らないが、H₂S₂、H₂S₃、H₂S₄になるとこの領域に入るといふのである。これは空気中あるいは鼻の粘膜上の水の中で酸化することを意味づける。しかしこれらを実証する

方法はまだ何もないのである。

このようににおいと物質の関係、においを引起す機構においの生体を与える影響の根本原理は解明されていないのである。生命に関する定量的な研究は、人間性の尊敬、宗教的、人道的立場から多くの困難を伴い、技術的にもたいへん難しい問題であった。しかし最近新しい研究分野として取り上げられつゝあり、生命の本質をつかさどる遺伝子(DNA、RNA)、酵素、蛋白質が電子レベルでとらえられようとしている。鼻水の中にはリゾチームという酵素が溶けており、これはX線解析の結果三次元構造まで解明されている。これらの物質を始め、その他の蛋白質の活性、機能がとらえられれば、においの謎を解く一端になるかも知れない。しかしこれらの学問の完成されるのを不快臭に耐えながら待つ意義があるのか。全くない。においの原理が解き明されたとしても、又不快臭だけを消すことが出来たとしても、それが動物の原始的武器を無能にする結果となるならば、それは私達にとって何ら意義を持たない。私達の鼻はにおいを嗅ぎ分ける一番信頼出来るデテクターである。不快臭は公害である。

一歩外に出ると排気ガスのおいがする。新しい家庭用品(発熱性のもの)を買えば、ベークのおいや断熱